

■差の検定結果

→「幸福度の平均値」「居住継続意向を持つ回答者の割合」について、回答者の特徴ごとに統計的に有意な差があるか否かを検定した。

回答者の特徴	幸福度		居住継続意向を持つ回答者の割合	
	有意差の有無	ページ数	有意差の有無	ページ数
年齢	○	p.13-p.14	○	p.04-p.05
世帯の種類	○	p.15-p.16	×	p.06-p.07
性別	○	p.17	-	
居住地区	×	p.18	○	p.10-p.11
居住経歴	○	p.19-p.20	○	p.08-p.09
頼れる人として非同居家族をあげたか否か	×	p.21	-	
頼れる人として恋人をあげたか否か	○	p.22	-	
頼れる人として友人をあげたか否か	×	p.23	-	
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否か	○	p.24-p.25	-	
ペットの有無	×	p.26	-	
雇用形態	○	p.27	-	
主な職業	×	p.28-p.29	-	
職業以外の地域活動	○	p.30	-	
風スコア	○	p.38-p.39	-	
土スコア	○	p.39-p.40	-	
幸せ要因数	○	p.32-p.33	-	
要因ギャップ	○	p.34-p.36	-	
幸福度	-		○	p.01-p.03

有意差がある	○
有意差がない	×
分析していない	-

■普段から感じる幸せが言われてみて気付く幸せかについて

→「幸せを感じる時の質問」の各項目について、「普段から幸せを感じる要素」と回答した割合と「言われてみれば幸せを感じる要素」と回答した割合に差があるか否かを検定した。

		普段から そう感じていた	言われてみれば そうだ	T検定の結果
T01	おいしいものを飲み食いしているとき	61.0%	29.1%	1%水準有意な差がある
T02	仕事に没頭しているとき	27.3%	40.3%	1%水準有意な差がある
T03	趣味に没頭しているとき	48.7%	32.1%	1%水準有意な差がある
T04	何かをやり遂げたとき	46.0%	37.8%	1%水準有意な差がある
T05	自分自身の成長を感じたとき	29.6%	46.0%	1%水準有意な差がある
T06	新たな刺激をもらったとき	29.1%	46.0%	1%水準有意な差がある
T07	一人で何をしてもなくのんびり過ごしているとき	42.8%	36.9%	5%水準有意な差がある
T08	仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき	33.2%	42.1%	1%水準有意な差がある
T09	仲間と何をしてもなくのんびり過ごしているとき	26.4%	44.2%	1%水準有意な差がある
T10	人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき	50.6%	34.0%	1%水準有意な差がある
T11	家族や恋人と一緒に何かをしているとき	46.7%	34.8%	1%水準有意な差がある
T12	家族や恋人と何をしてもなくのんびり過ごしているとき	43.1%	35.8%	5%水準有意な差がある
T13	子や孫の成長を感じられたとき	56.9%	18.4%	1%水準有意な差がある
T14	ペットといるとき	25.5%	15.5%	1%水準有意な差がある
T15	自然の美しさや心地よさに触れたとき	50.8%	30.5%	1%水準有意な差がある
T16	外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき	25.8%	44.0%	1%水準有意な差がある
T17	普段からいつも幸せを感じている	36.0%	44.6%	5%水準有意な差がある
T18	とっておきの場所を見つけたとき	27.6%	42.2%	1%水準有意な差がある

■検定結果の概要

①. 幸福度の平均値の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い
年齢	40歳未満
世帯の種類	自分の親と同居していない世帯
性別	女性
居住経歴	富良野圏外での居住経験あり
気軽に頼れる相手として	恋人をあげた人 非同居家族・恋人・友人以外をあげた人
雇用形態	非正規雇用ではない
地域活動	職業以外の地域活動をしている
要因ギャップ	要因ギャップ数5未満

②. 幸福度の多寡による幸せの感度の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い
幸せ要因数	幸福度5以上

■検定結果の概要

③. 居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い	
年齢	60歳以上	60歳未満
居住地区	山部エリア 麓郷エリア	その他の地区
居住経歴	市内のみor富良野圏 外の居住経験あり	市外の居住経験はあるが富良野圏内のみ
幸福度	幸福度5以上	幸福度4以下

富良野市幸福度調査 分析結果

■一般向けアンケートの分析結果

・分析①. 居留意向と主観的幸福度の関係

居留意向の回答ごとに、主観的幸福度の平均値及び幸福度の度数別回答者数を集計した。その結果を表 1、図 1～2 に示す。

表 1. 居留意向と主観的幸福度のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
住み続けたいと思っており 実際に住み続けるつもり	305	5.18	2	1	10	64	92	88	43
住み続けたいと思っているが 住み続けるのは難しそう	47	3.32	0	1	4	9	13	1	5
外に住替えたいと思っているが 住み替えは難しそう	29	4.41	0	1	5	7	8	6	1
外に住替えたいと思っており 実際に住み替えを検討している	25	5.24	0	1	2	3	8	6	5
分からない	82	4.79	0	3	4	27	15	25	6

図 1 及び図 2 より、幸福度は、「外に住み替えたいと思っているが、住み替えは難しそう」と回答した者において、他の回答者より低い傾向が見られた。

一方、同じ転出希望でも、「外に住み替えたいと思っており、実際に住み替えを検討している」と回答した者の幸福度は、むしろ「住み続けたいと思っており、実際に住み続けるつもり」及び「住み続けたいと思っているが、住み続けるのは難しそう」と回答した者（以降、両者を合わせて「居住継続意向を持つ回答者」と記載する）の幸福度よりも若干高い傾向にあった。

そこで、居住継続意向を持つ回答者と「外に住み替えたいと思っているが、住み替えは難しそう」及び「外に住み替えたいと思っており、実際に住み替えを検討している」と回答した者（以降、両者を合わせて「住み替え意向を持つ回答者」と記載する）で幸福度の平均値に差があるか否かを確認するべく t 検定を行った。その結果、両者の幸福度の平均値には 1%水準で有意な差があると判断された（平均値の差を検定した結果、有意水準が 10%未満ならば差があると判断する）（表 2）。なお、t 検定に当たっては、幸福度の回答を標準化している（以降の分析も同様の処理を行っている）。

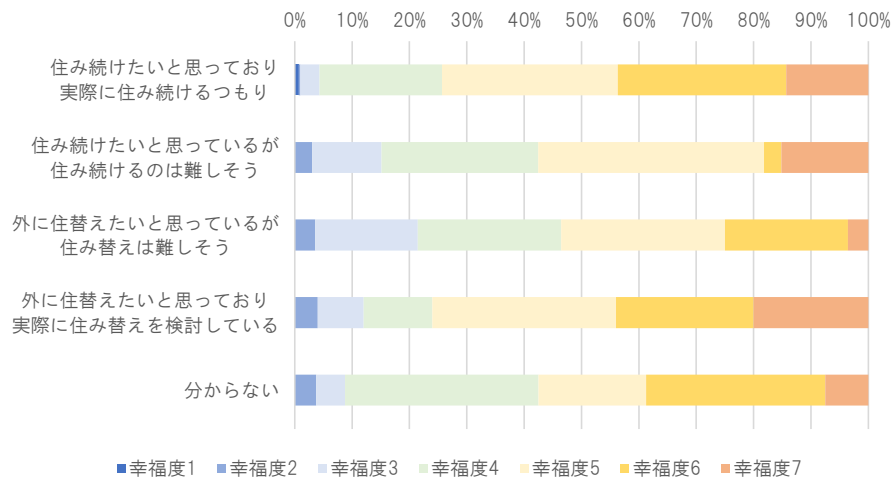


図1. 居留意向別幸福度別回答者の割合

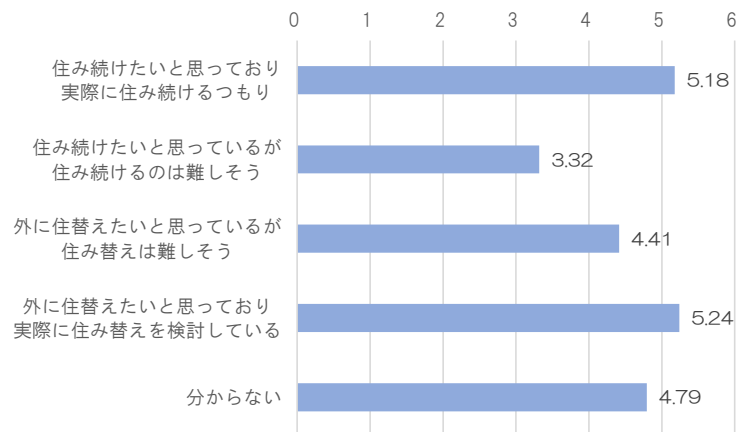


図2. 居住継続意向別幸福度の平均値

表2. 居住継続意向を持つ回答者と持たない回答者の幸福度の差の検定結果

	居住継続意向あり	居住継続意向なし
平均	0.117	-0.192
分散	0.788	1.300
観測数	349	212
仮説平均との差異	0	
自由度	365	
t	3.376	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<=t) 両側	0.001	
t 境界値 両側	1.966	

次に、幸福度の多寡によって居留意向に異なる傾向があるのか確かめるため、幸福度の度数ごとに居住継続意向を持つ回答者の割合を集計した。その結果、幸福度1グループを除くと、概ね、幸福度が高いほど居住継続意向の割合も高い傾向が見られた(図3)。なお、幸福度1のグループはサンプル数が2であり、平均値によって他のグループと比較して傾向を議論するのは難しい。以上の結果を踏まえて、幸福度が比

較的高い回答者（幸福度 5 以上）とそうでない回答者（幸福度 4 以下）で住み替え意向を持つ回答者の割合に差があるか否か確認するべく t 検定を行ったところ、1% 水準で有意な差があると判断された（表 3）。これらの結果から、幸福度が高い回答者は居住継続意向が強い傾向にあると考えられた（図 4）。

表 3. 幸福度の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	0.668	0.527
分散	0.222	0.251
観測数	377	184
仮説平均との差異	0	
自由度	344	
t	3.198	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.967	

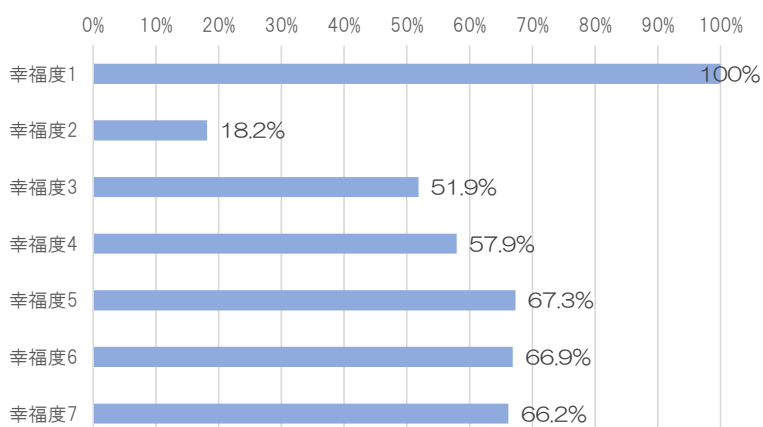


図 3. 幸福度別居住継続意向を持つ回答者の割合

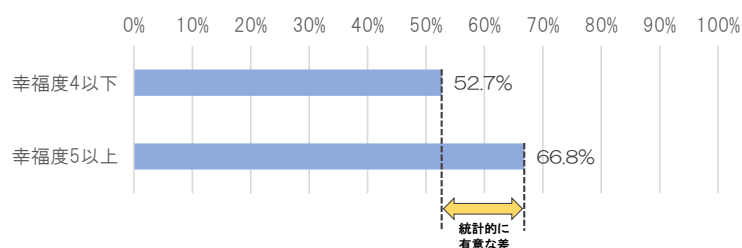


図 4. 幸福度 5 以上の回答者と 4 以下の回答者の居住継続意向を持つ回答者の割合

・分析②. 居住継続意向を持つ回答者の特徴

【その1：居留意向と回答者の年齢の関係】

居留意向の回答ごとに、年齢（6レンジ）別回答者数を集計した結果を表4に示す。また、年齢（6レンジ）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図5に示す。60歳以上の回答者は60歳未満の回答者よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が高い傾向が見られた（表4, 図5）。

表4. 居留意向と回答者の年齢のクロス集計表

	サンプル数	回答者の年代					
		18～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	305	14	24	37	40	62	118
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	47	4	5	6	5	12	10
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	29	1	6	6	8	5	2
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	25	4	6	5	1	6	2
分からない	82	7	8	14	27	7	16

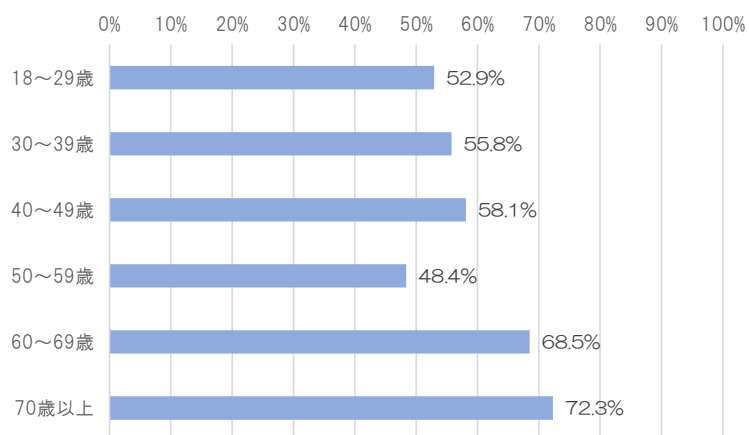


図5. 年齢別居住継続意向を持つ回答者の割合

60歳以上の回答者と60歳未満の回答者の2つのグループについて、住み替え意向を持つ回答者の割合の差が統計的に有意か否かを確認するべくt検定を行った。その結果、1%水準で有意な差があると判断された(表5)。これらの結果より、60歳以上の回答者は60歳未満の回答者よりも居住継続意向が強い傾向にあると分かった(図6)。

表5. 回答者の年齢の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	60歳以上	60歳未満
平均	0.707	0.536
分散	0.208	0.250
観測数	283	278
仮説平均との差異	0	
自由度	552	
t	4.225	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.648	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.964	

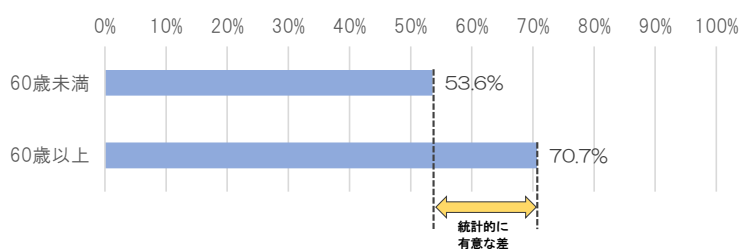


図6. 60歳以上の回答者と60歳未満の回答者の居住継続意向を持つ回答者の割合

【その2：居留意向と世帯の種類の関係】

居留意向の回答ごとに、世帯の種類（6種類）別回答者数を集計した。その結果を表6に示す。また、世帯の種類（6レンジ）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図7に示す。居住継続意向は、「単身世帯」で低く、「夫婦世帯」および「自分の親と同居する非子育て世帯」でやや高めの傾向が見られた。

表 6. 居留意向と世帯の種類のカロス集計表

	サンプル数	世帯の種類					
		単身赴任	単身世帯	夫婦世帯	子育て中の核家族世帯	自分の親と同居する多世代居住世帯	自分の親と同居する非子育て世帯
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	305	12	23	160	16	27	37
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	47	5	5	19	8	3	5
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	29	0	1	10	8	3	4
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	25	2	3	12	3	2	1
分からない	82	5	10	36	5	5	6

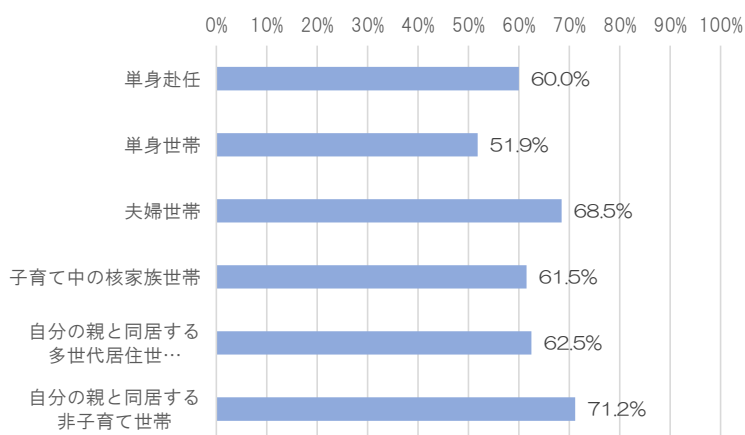


図 7. 世帯の種類別居住継続意向を持つ回答者の割合

各種世帯の居住継続意向を持つ世帯の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、どのグループ間にも有意な差（有意水準 10%未満）はないと算出された（表 7）。

表 7. 世帯の種類の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
単身赴任	25	15	0.600	0.250
単身世帯	54	28	0.519	0.254
夫婦世帯	260	178	0.685	0.217
子育て中の核家族世帯	39	24	0.615	0.243
自分の親と同居する多世代居住世帯	48	30	0.625	0.239
自分の親と同居する非子育て世帯	59	42	0.712	0.209

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	1.604	5	0.321	1.420	0.216	2.233
グループ内	108.202	479	0.226			
合計	109.806	484				

【その3：居留意向と居住経歴の関係】

居留意向の回答ごとに、居住経歴（3区分）別回答者数を集計した。その結果を表8に示す。また、居住経歴（3区分）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図8に示す。表8及び図8より、居住継続意向を持つ世帯の割合は、居住経歴が「富良野市のみ」および「富良野圏以外での居住経歴あり」において高く、「富良野圏域のみ」が低い傾向が見られた。

表8. 居留意向と居住経歴のクロス集計表

	サンプル数	居住経歴		
		富良野市にしか住んだことがない	市外に住んだことはあるが富良野圏のみ	富良野圏以外での居住経歴あり
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	305	109	12	161
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	47	13	1	32
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	29	6	0	23
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	25	2	0	22
分からない	82	22	10	39

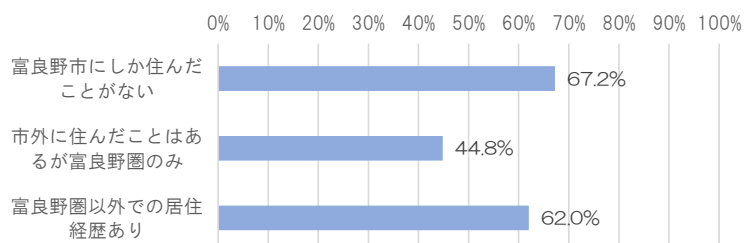


図8. 居住経歴別居住継続意向を持つ回答者の割合

各居住経歴グループの居住継続意向を持つ世帯の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された(表9)。具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかをt検定で確認したところ、「富良野市のみ」と「富良野圏域のみ*(*:居住経歴が富良野市のみの回答者を除く)」及び「富良野圏以外での居住経歴」と「富良野圏域のみ*」の間にそれぞれ5%~10%水準で有意な差があると算出された(図9)。

表9. 居住経歴の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
富良野市にしか住んだことがない	180	121	0.672	0.222
市外に住んだことはあるが富良野圏のみ	29	13	0.448	0.256
富良野圏以外での居住経歴あり	308	191	0.620	0.236

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	1.308	2	0.654	2.815	0.061	3.013
グループ内	119.389	514	0.232			
合計	120.696	516				

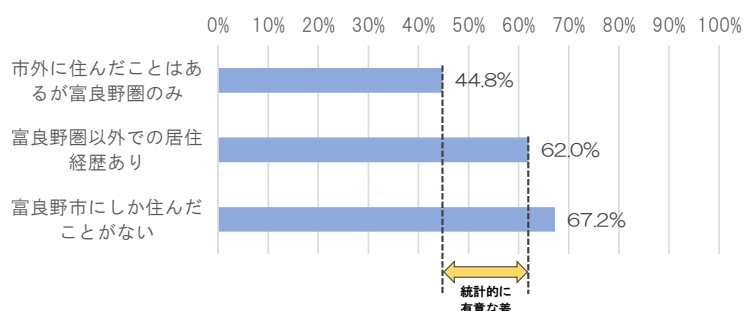


図9. 居住経歴の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

【その4：居留意向と居住地区の関係】

居留意向の回答ごとに、居住地区（5区分）別回答者数を集計した。その結果を表10に示す。また、居住地区（5区分）別に居住継続意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図10に示す。表10及び図10より、居住継続意向を持つ世帯の割合は東山エリアや本市街地で相対的に低く、麓郷エリアや山部エリアで相対的に高い傾向が見られた。

表 10. 居留意向と居住地区のクロス集計表

	サンプル数	居住地				
		本市街地	市街地近郊	麓郷エリア	山部エリア	東山エリア
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	305	166	48	45	22	19
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	47	29	4	2	5	5
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	29	20	2	4	0	2
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	25	18	1	1	1	3
分からない	82	52	10	5	3	6

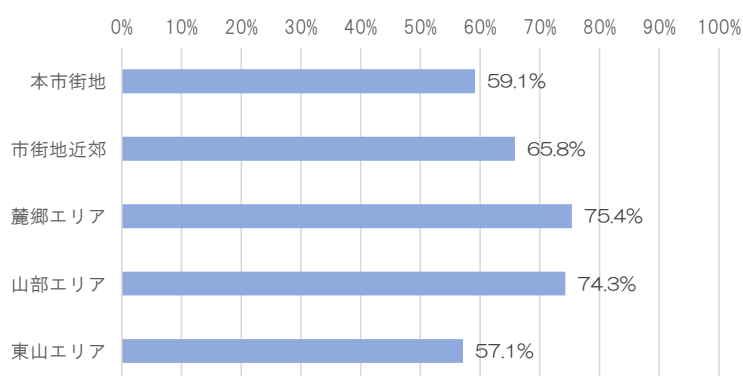


図 10. 居住地区別居住継続意向を持つ回答者の割合

各地区の居住継続意向を持つ世帯の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表 11）。具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「山部エリア」と「本市街地」、「山部エリア」と「東山エリア」、「麓郷エリア」と「本市街地」及び「麓郷エリア」と「東山エリア」の間にそれぞれ 1%～10%水準で有意な差があると判断された（図 11）。それ以外の組み合わせでは統計的に有意な差（有意水準 10%未満）はなかった。

表 11. 居住地区の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
本市街地	328	194	0.591	0.242
市街地近郊	79	52	0.658	0.228
麓郷エリア	61	46	0.754	0.189
山部エリア	35	26	0.743	0.197
東山エリア	42	24	0.571	0.251

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	2.076	4	0.519	2.237	0.064	2.388
グループ内	125.311	540	0.232			
合計	127.387	544				

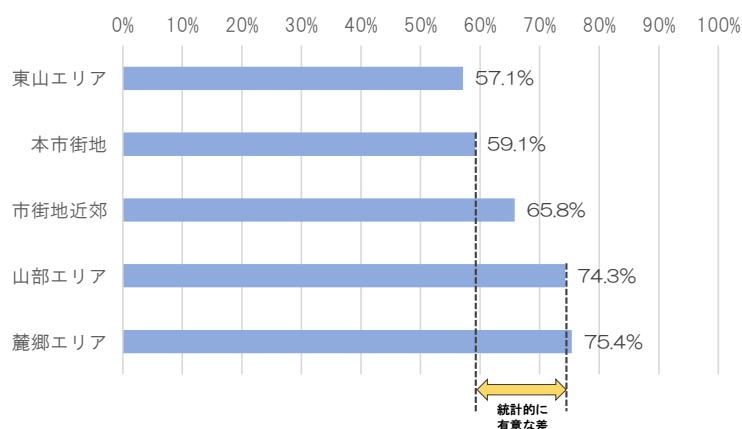


図 11. 居住地区の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

【小括：居住継続意向を持つ回答者の特徴】

以上の分析から、居住継続意向を持つ回答者には次のような特徴があると把握できた。

- ①. 「幸福度が5以上の回答者」は、「幸福度が4以下の回答者」よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が高い傾向にある。
- ②. 「60歳以上の回答者」は、「60歳未満の回答者」よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が高い傾向にある。
- ③. 「富良野圏内にしか住んだことのない回答者*」は、「富良野市にしか住んだことのない回答者」や「富良野圏外での居住経歴を持つ回答者」よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が相対的に低い傾向にある。
- ④. 「山部エリア」「麓郷エリア」に居住する回答者は、「本市街地」「東山エリア」に居住する回答者よりも富良野圏以外での居住経歴がある回答者は富良野市・富良野圏内にしか住んだことのない回答者よりも、住み替え意向を持つ回答者の割合が相対的に高い傾向にある。
- ⑤. 世帯の種類によって住み替え意向を持つ回答者の割合に統計的に有意な差（有意水準10%未満）はないと算出された。

・分析③. 主観的幸福度の多寡に影響する回答者属性

【その1：幸福度と回答者の年齢の関係】

幸福度の度数ごとに、年齢（6レンジ）別回答者数を集計した。その結果を表12に示す。また、年齢（6レンジ）別に幸福度の平均値を算出した結果を図12に示す。表12及び図12より、40歳未満の回答者は幸福度が相対的に高い傾向にあるのに対し、40歳以上の回答者は幸福度が相対的に低い傾向にあると分かる。

表 12. 幸福度と回答者の年齢のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
18～29歳	34	5.38	0	1	2	3	12	9	7
30～39歳	52	5.42	0	0	1	10	12	17	11
40～49歳	74	4.88	0	3	7	15	21	20	7
50～59歳	92	4.68	1	2	7	27	21	25	6
60～69歳	108	5.00	0	2	4	25	33	28	13
70歳以上	175	5.05	1	2	6	38	50	45	27

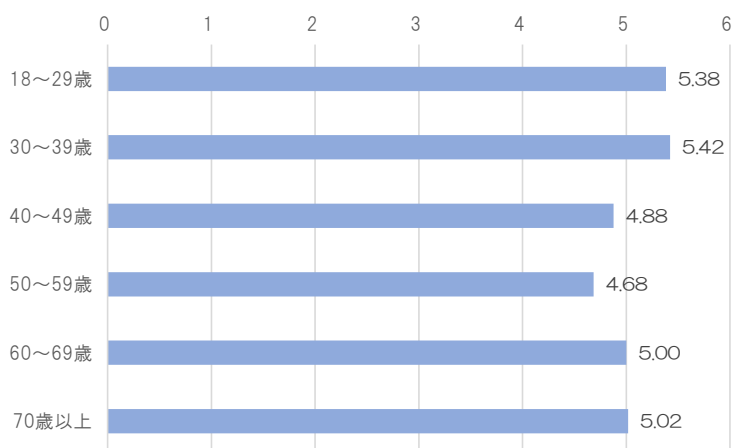


図 12. 年齢別幸福度の平均値

40歳以上の回答者と40歳未満の回答者の2つのグループについて、住み替え意向を持つ回答者の割合の差が統計的に有意か否かを確認するべくt検定を行った。その結果、1%水準で有意な差があると判断された(表13)。これらの結果より、60歳以上の回答者は60歳未満の回答者よりも居住継続意向が強い傾向にあると分かった(図13)

表13. 回答者の年齢の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

	40歳未満	40歳以上
平均	0.296	-0.030
分散	0.755	0.993
観測数	86	449
仮説平均との差異	0	
自由度	132	
t	3.101	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.656	
P(T<=t) 両側	0.002	
t 境界値 両側	1.978	

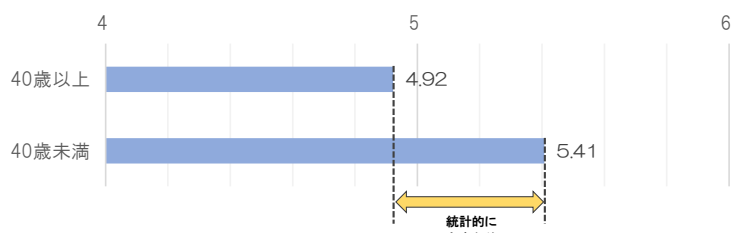


図13. 年齢の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その2：幸福度と世帯の種類の関係】

幸福度の度数ごとに、世帯の種類（9種類）別回答者数を集計した。その結果を表14に示す。また、世帯の種類（9レンジ）別に幸福度の平均値を算出した結果を図14に示す。表14及び図14より、いずれのグループも幸福度の平均値は5前後であったが、中でも、自分の親と同居する世帯は幸福度がやや低い傾向が見られた。

世帯の種類による幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認した（「子育て中の一人親世帯」、「配偶者の親と同居する多世代同居世帯」、「配偶者の親と同居する非子育て世帯」は分散分析・t検定を行うにはサンプル数が少なすぎ

表 14. 幸福度と世帯の種類のカロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
単身赴任	25	4.96	0	0	1	4	13	2	4
単身世帯	54	4.89	0	2	2	14	8	17	8
夫婦世帯	260	5.20	0	3	9	54	66	88	35
子育て中の核家族世帯	39	5.28	0	1	2	8	9	12	7
子育て中の一人親世帯	4	5.00	0	0	0	1	2	1	0
自分の親と同居する多世代居住世帯	48	4.40	2	3	3	15	15	4	5
配偶者の親と同居する多世代居住世帯	3	5.33	0	0	0	0	2	1	0
自分の親と同居する非子育て世帯	59	2.95	0	1	3	15	3	10	4
配偶者の親と同居する非子育て世帯	1	5.00	0	0	0	0	1	0	0

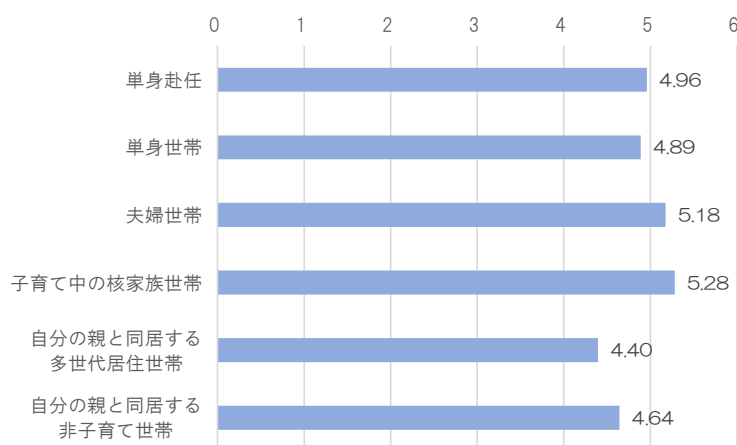


図 14. 世帯の種類別幸福度の平均値

ると判断し、以降の分析の対象外とした)。その結果、1%水準で有意な差があると判断された(表 15)

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「夫婦世帯」と「自分の親と同居する多世代居住世帯」、「夫婦世帯」と「自分の親と同居する日子育て世帯」、「子育て中の核家族世帯」と「自分の親と同居する多世代居住世帯」、「子育て中の核家族世帯」と「自分の親と同居する日子育て世帯」の間にそれぞれ 5%水準で有意な差があると判断された(図 15)。それ以外の組み合わせで統計的に有意な差(有意水準 10%未満)はなかった。以上より、夫婦世帯及び核家族世帯は親と同居している回答者よりも統計的に幸福度が高い傾向にあることが分かった。

表 15. 世帯の種類の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
単身赴任	25	-0.103	-0.004	0.954
単身世帯	54	-2.796	-0.052	1.385
夫婦世帯	260	36.740	0.141	0.843
子育て中の核家族世帯	39	8.259	0.212	0.732
自分の親と同居する多世代居住世帯	48	-18.351	-0.382	1.123
自分の親と同居する非子育て世帯	59	-12.738	-0.216	1.004

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	16.602	5	3.320	3.507	0.004	2.233
グループ内	453.461	479	0.947			
合計	470.063	484				

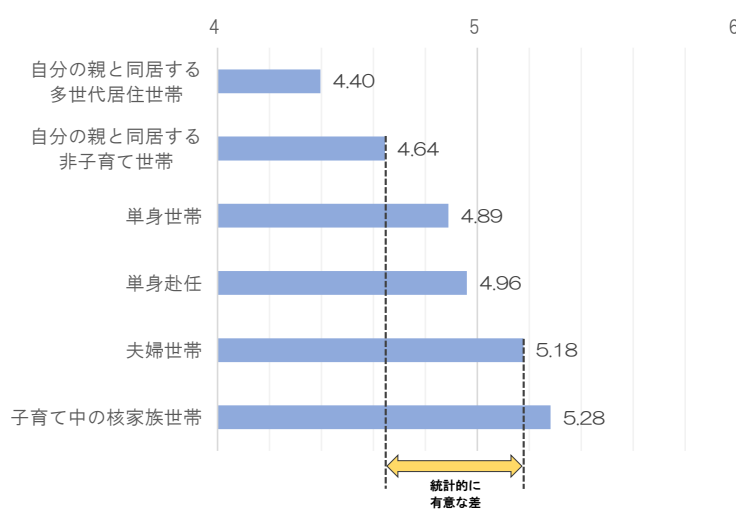


図 15. 世帯の種類の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その3：幸福度と回答者の性別の関係】

幸福度の度数ごとに、男女別回答者数を集計した。その結果を表 16 に示す。また、男女別に幸福度の平均値を算出した結果を図 16 に示す。表 16 及び図 16 より、幸福度は、女性の回答者の方が男性の回答者よりも相対的に高い傾向が見られた。

性別による幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表 17, 図 17）

表 16. 幸福度と回答者の性別のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
男性	185	4.87	1	4	8	53	55	46	15
女性	222	5.13	0	2	10	39	60	66	36

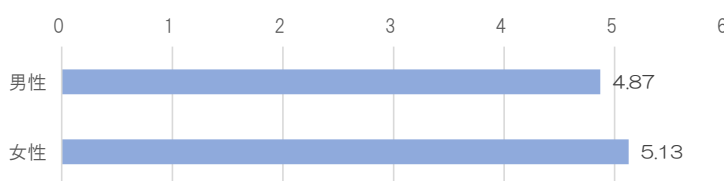


図 16. 男女別幸福度の平均値

表 17. 回答者の性別の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

	男性	女性
平均	-0.064	0.107
分散	0.769	1.075
観測数	185	222
仮説平均との差異	0	
自由度	405	
t	-1.808	
P(T<=t) 片側	0.036	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<=t) 両側	0.071	
t 境界値 両側	1.966	

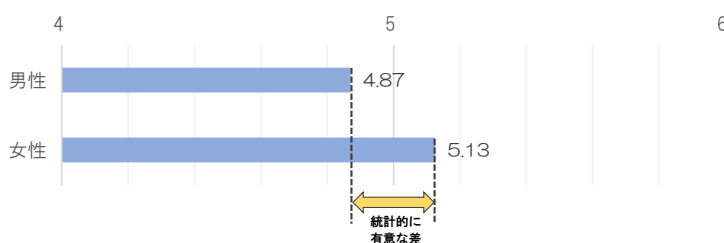


図 17. 性別の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その4：幸福度と居住地区の関係】

幸福度の度数ごとに、居住地区（5区分）別回答者数を集計した。その結果を表18に示す。また、居住地区（5区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図18に示す。表18及び図18より、幸福度の平均値はいずれも5前後であり、市街地近郊や麓郷エリアでやや高めの傾向が見られた。ただし、各地区の幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、どのグループ間にも有意な差（10%水準）はないと判断された（表19）。

表 18. 幸福度と居住地区のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
本市街地	328	4.97	0	6	15	75	99	84	39
市街地近郊	79	5.27	0	0	5	12	19	29	12
麓郷エリア	61	5.11	0	2	2	16	13	16	11
山部エリア	35	4.66	1	0	3	7	10	9	3
東山エリア	42	4.79	1	2	1	12	9	12	4

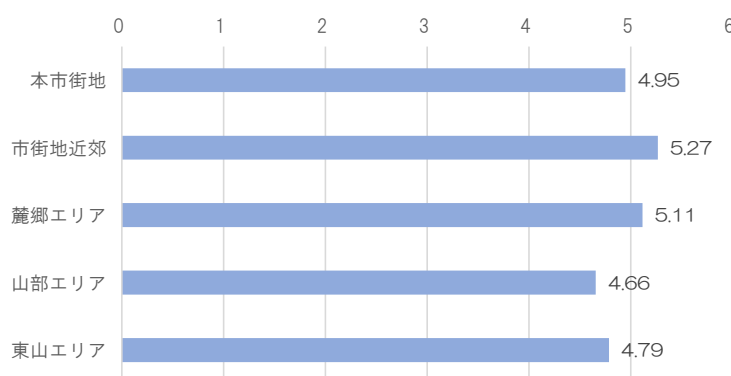


図 18. 居住地区別幸福度の平均値

表 19. 居住地区の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
本市街地	328	-3.949	-0.012	0.965
市街地近郊	79	15.871	0.201	0.884
麓郷エリア	61	6.078	0.100	0.945
山部エリア	35	-7.250	-0.207	1.347
東山エリア	42	-5.080	-0.121	1.108

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	5.899	4	1.475	1.496	0.202	2.388
グループ内	532.389	540	0.986			
合計	538.288	544				

【その5：幸福度と居住経歴の関係】

幸福度の度数ごとに、居住経歴（3区分）別回答者数を集計した。その結果を表20に示す。また、居住経歴（3区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図19に示す。表20及び図19より、幸福度は、富良野圏以外での居住経歴がある回答者で、他よりもやや高めの傾向が見られた。

居住経歴の違いによる幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、5%水準で有意な差があると判断された（表21）。

表 20. 幸福度と居住経歴のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
富良野市にしか住んだことがない	180	4.79	1	4	9	46	52	44	17
市外に住んだことはあるが富良野圏のみ	29	4.55	0	0	1	10	8	7	1
富良野圏以外での居住経歴あり	308	5.13	0	7	16	59	88	88	45

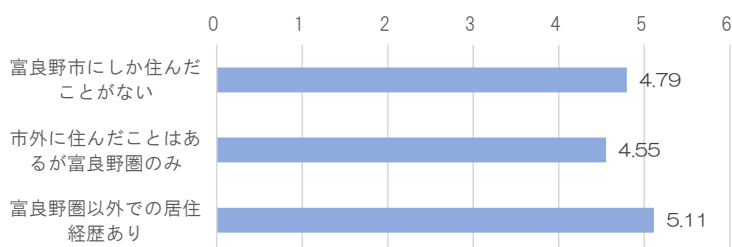


図 19. 居住経歴別幸福度の平均値

表 21. 居住経歴の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
富良野市にしか住んだことがない	180	-20.717	-0.115	1.038
市外に住んだことはあるが富良野圏のみ	29	-8.056	-0.278	1.110
富良野圏以外での居住経歴あり	308	30.456	0.099	0.877

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	7.629	2	3.814	4.034	0.018	3.013
グループ内	486.056	514	0.946			
合計	493.685	516				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「富良野圏以外での居住経歴がある回答者」と「富良野市にしか住んだことのない回答者」及び「富良野圏以外での居住経歴がある回答者」と「富良野圏内にしか住んだことのない回答者*」のグループの間にそれぞれ 1%水準で有意な差があると判断された（図 20）。

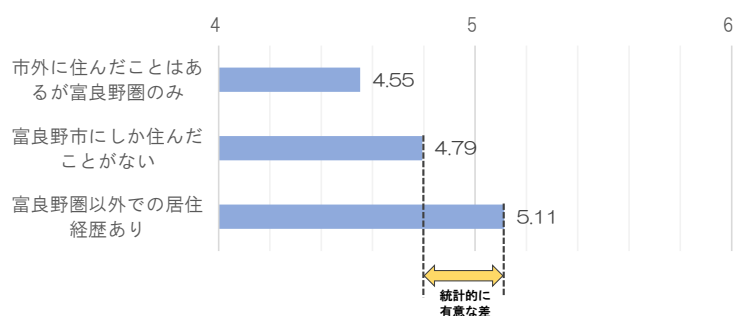


図 20. 居住経歴の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その6：幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 22 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 21 に示す。表 22 及び図 21 より、幸福度は、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげなかった人において相対的に高い傾向が見られた。

ただし、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差（有意水準 10%未満）はないと判断された（表 23）。

表 22. 幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として非同居家族をあげた人	361	4.97	1	8	19	78	116	88	43
頼れる人として非同居家族をあげなかった人	200	4.99	1	3	8	48	40	63	28

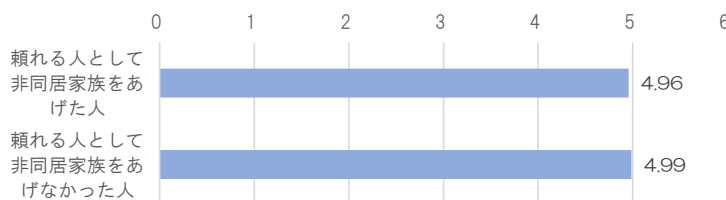


図 21. 気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否か別幸福度の平均値

表 23. 気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる人として非同居家族をあげた人	頼れる人として非同居家族をあげなかった人
平均	-0.007	0.013
分散	0.905	1.181
観測数	361	200
仮説平均との差異	0	
自由度	367	
t	-0.214	
P(T<t) 片側	0.415	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<t) 両側	0.830	
t 境界値 両側	1.966	

【その7：幸福度と気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 24 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 22 に示す。表 24 及び図 22 より、幸福度は、気軽に頼れる相手として恋人をあげた人において相対的に高い傾向が見られた。

気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 25, 図 23）。

表 24. 幸福度と気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として恋人をあげた人	42	5.52	0	0	2	6	13	10	11
頼れる人として恋人をあげなかった人	519	4.93	2	11	25	120	143	141	60

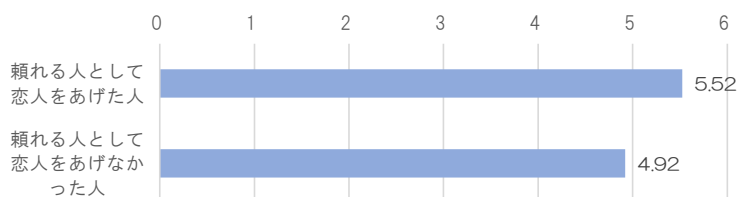


図 22. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否か別幸福度の平均値

表 25. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる人として恋人をあげた人	頼れる人として恋人をあげなかった人
平均	0.374	-0.030
分散	0.619	1.022
観測数	42	519
仮説平均との差異	0	
自由度	53	
t	3.126	
P(T<=t) 片側	0.001	
t 境界値 片側	1.674	
P(T<=t) 両側	0.003	
t 境界値 両側	2.006	

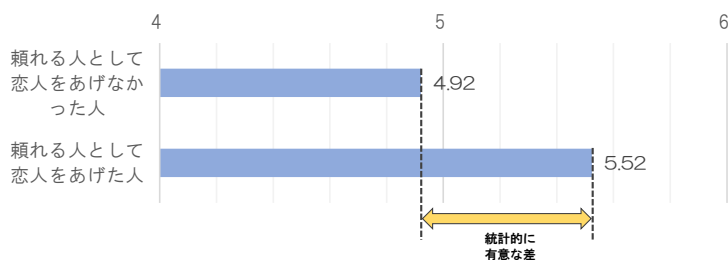


図 23. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その8：幸福度と気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 26 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 24 に示す。表 26 及び図 24 より、幸福度は、気軽に頼れる相手として友人をあげた人において相対的に高い傾向が見られた。

ただし、気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差（有意水準 10%未満）はないと判断された（表 27）。

表 26. 幸福度と気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として友人をあげた人	131	5.12	0	4	4	24	37	36	22
頼れる人として友人をあげなかった人	430	4.93	2	7	23	102	119	115	49

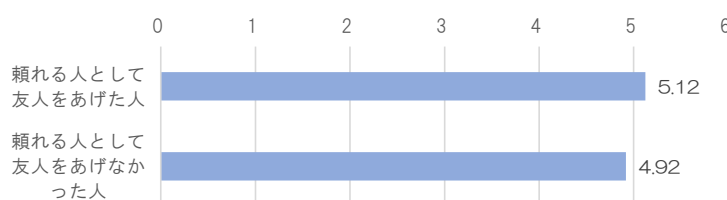


図 24. 気軽に頼れる相手として友人をあげたか否か別幸福度の平均値

表 27. 気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる人として友人をあげた人	頼れる人として友人をあげなかった人
平均	0.105	-0.032
分散	1.030	0.991
観測数	131	430
仮説平均との差異	0	
自由度	212	
t	1.353	
P(T<=t) 片側	0.089	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.178	
t 境界値 両側	1.971	

【その9：幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 28 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 25 に示す。表 28 及び図 25 より、幸福度は、気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげた人において相対的に高い傾向が見られた。

気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表 29, 図 26）。

表 28. 幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげた人	84	5.21	1	1	3	18	24	25	12
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげなかった人	477	4.94	1	10	24	108	132	126	59

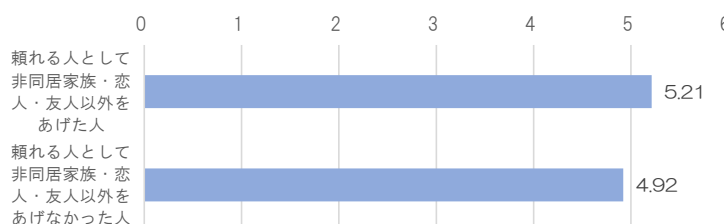


図 25. 気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否か別幸福度の平均値

表 29. 気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげた人	頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげなかった人
平均	0.166	-0.029
分散	0.672	1.056
観測数	84	477
仮説平均との差異	0	
自由度	133	
t	1.936	
P(T<=t) 片側	0.028	
t 境界値 片側	1.656	
P(T<=t) 両側	0.055	
t 境界値 両側	1.978	

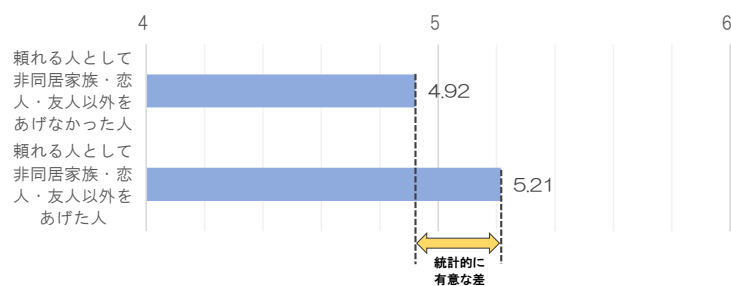


図 26. 気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その10：幸福度とペットの有無の関係】

幸福度の度数ごとに、ペットの有無別回答者数を集計した。その結果を表 30 に示す。また、ペットの有無別に幸福度の平均値を算出した結果を図 27 に示す。表 30 及び図 27 より、ペットを飼っていない回答者はペットを飼っている回答者よりも幸福度が若干高い傾向が見られた。

ただし、ペットの有無による幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、有意な差（有意水準 10%未満）はないと算出された（表 31）

表 30. 幸福度とペットの有無のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
ペットを飼っている	141	4.92	2	6	8	26	37	39	19
ペットを飼っていない	420	5.00	0	5	19	100	119	112	52

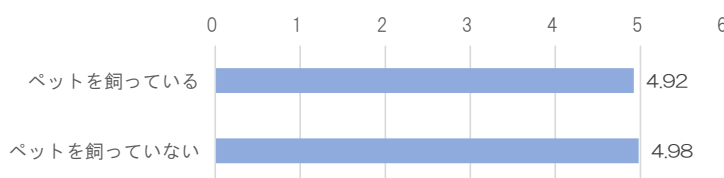


図 27. ペットの有無別幸福度の平均値

表 31. ペットの有無による幸福度の平均値の差の検定結果

	ペットを飼っている	ペットを飼っていない
平均	-0.030	0.010
分散	1.150	0.954
観測数	141	420
仮説平均との差異	0	
自由度	223	
t	-0.387	
P(T<=t) 片側	0.350	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<=t) 両側	0.699	
t 境界値 両側	1.971	

【その11：幸福度と雇用形態の関係】

幸福度の度数ごとに、雇用形態（3区分）別回答者数を集計した。その結果を表32に示す。また、雇用形態（3区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図28に示す。表32及び図28より、幸福度の平均値は、自営業、正規雇用、非正規雇用の順に高い傾向が見られた。

各雇用形態の幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表33）。具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかをt検定で確認したところ、非正規雇用の回答者とそれ以外のグループの間にそれぞれ5%～10%水準で有意な差があると判断された（図29）。

表 32. 幸福度と雇用形態のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
自営業	138	5.21	2	4	7	25	30	45	24
正規雇用	111	5.08	0	2	4	25	38	29	12
非正規雇用	83	4.75	0	3	6	27	22	16	8

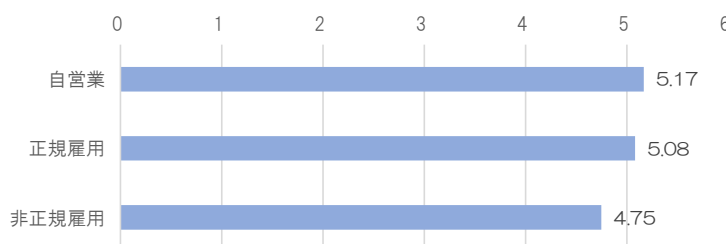


図 28. 雇用形態別幸福度の平均値

表 33. 雇用形態による幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
自営業	138	18.552	0.134	1.008
正規雇用	111	8.553	0.077	0.655
非正規雇用	83	-12.193	-0.147	0.798

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	4.275	2	2.137	2.552	0.079	3.023
グループ内	275.532	329	0.837			
合計	279.807	331				

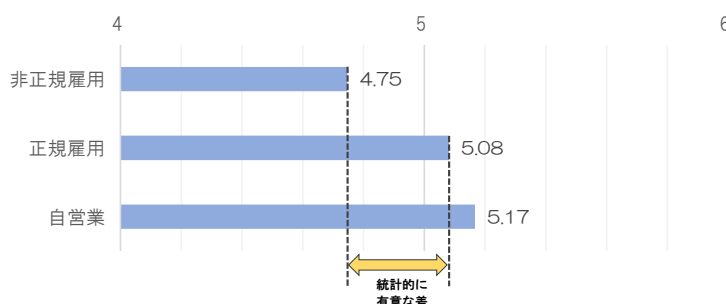


図 29. 雇用形態の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その12：幸福度と職業の関係】

幸福度の度数ごとに、主な職業（8区分）別回答者数を集計した。その結果を表34に示す。また、主な職業（8区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図30に示す。表34及び図30より、医療・福祉関係、家事専業、学生において、幸福度が相対的に高い傾向が見られた。

表 34. 幸福度と主な職業のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
農業・林業	110	4.95	2	4	7	24	28	30	14
商業・サービス業	100	5.08	0	3	5	24	31	23	14
土木・建設・製造業	27	4.37	0	0	1	7	9	7	0
医療・福祉関係	36	5.44	0	0	0	8	9	14	5
公務員	43	5.19	0	1	2	8	16	9	7
家事専業	55	4.98	0	1	2	5	13	22	7
学生	8	5.25	0	0	0	2	3	2	1
無職	149	4.95	0	1	7	40	40	37	19

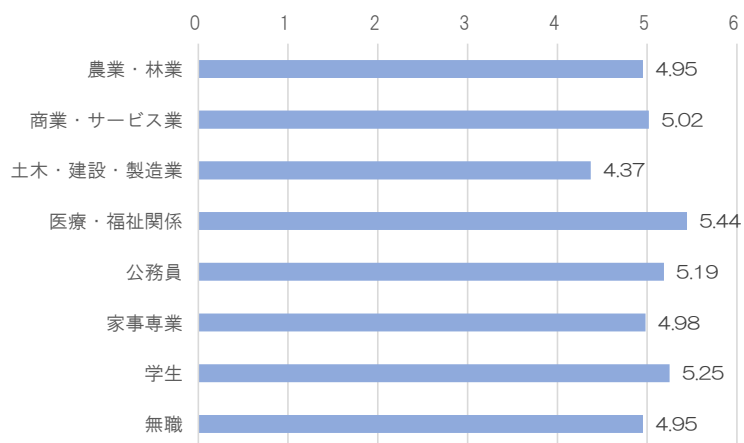


図 30. 主な職業別幸福度の平均値

ただし、各雇用形態の幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、どのグループ間にも有意な差（有意水準 10%未満）はないと判断された（表 35）。

表 35. 主な職業の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
農業・林業	110	-0.854	-0.008	0.951
商業・サービス業	100	3.611	0.036	0.790
土木・建設・製造業	27	-10.783	-0.399	1.422
医療・福祉関係	36	11.543	0.321	0.448
公務員	43	6.339	0.147	0.647
家事専業	55	0.578	0.011	1.639
学生	8	1.522	0.190	0.481
無職	149	-1.310	-0.009	0.955

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	9.172	7	1.310	1.376	0.213	2.027
グループ内	495.041	520	0.952			
合計	504.213	527				

【その13：幸福度と職業以外の地域活動実態の関係】

幸福度の度数ごとに、職業以外の地域活動の有無別回答者数を集計した。その結果を表36に示す。また、職業以外の地域活動の有無別に幸福度の平均値を算出した結果を図31に示す。表36及び図31より、幸福度の平均値は、職業以外の地域活動をしている回答者はそうでない回答者よりも相対的に高かった。

職業以外の地域活動の有無による幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表37、図32）

表 36. 幸福度と職業以外の地域活動の有無のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
職業以外の地域活動をしている	98	5.17	0	1	5	19	31	28	13
職業以外の地域活動をしていない	463	4.94	2	10	22	107	125	123	58

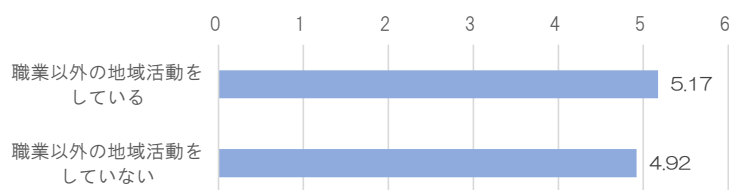


図 31. 職業以外の地域活動の有無別幸福度の平均値

表 37. 職業以外の地域活動の有無による幸福度の平均値の差の検定結果

	職業以外の地域活動をしている	職業以外の地域活動をしていない
平均	0.139	-0.029
分散	0.695	1.063
観測数	98	463
仮説平均との差異	0	
自由度	166	
t	1.74	
P(T<=t) 片側	0.04	
t 境界値 片側	1.65	
P(T<=t) 両側	0.08	
t 境界値 両側	1.97	

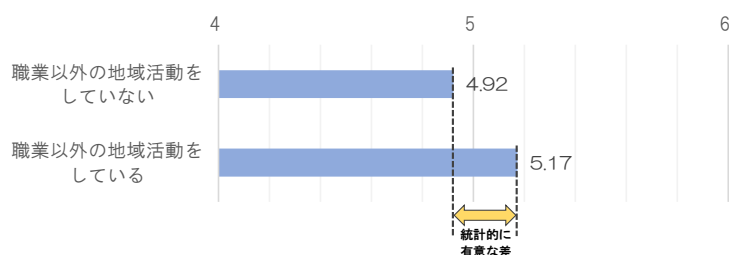


図 32. 職業以外の地域活動の有無による幸福度の平均値の差の検定結果

【小括：主観的幸福度の多寡に影響する回答者属性】

以上の分析から、次のような特徴があると考えられた。

- ①. 40歳未満の回答者は40歳以上の回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ②. 夫婦世帯・核家族世帯は親と同居している回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ③. 女性回答者は男性回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ④. 富良野圏以外での居住経歴がある回答者は富良野市・富良野圏内にしか住んだことのない回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ⑤. 気軽に頼れる相手として恋人をあげた回答者は、そうでなかった回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ⑥. 自営業及び正規雇用の回答者は非正規雇用の回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ⑦. 職業以外の地域活動をしている回答者はそうでない回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ⑧. 居住地区・ペットの有無・主な職業の職種に関しては、それぞれのグループごとの幸福度に統計的に有意な差(有意水準 10%未満)はないと判断された。

・分析④. 主観的幸福度と幸せを感じる要因の関係

幸せを感じる時・ことの質問（問 12・13）の各項目について、回答者ごとに幸せを感じる要因に該当する項目数を集計した（以降、この項目数を「幸せ要因数」と記載する）。仮説として、「幸せ要因数が多い人は、幸せを感じる感度が高く、結果として幸福度が高くなる」と考え、幸せ要因数と幸福度の関係を整理することとした。

まず初めに、幸せの要因数と幸福度の相関関係を分析した。その結果、相関係数は 0.325 であり、幸せの要因数と幸福度は強い相関関係にないと考えられた。

次に、幸福度の度数ごとに、幸せの要因数を集計した。結果を図 33 に示す。図 33 より、幸福度が 5 以上のグループは幸せの要因数が相対的に多いのに対し、幸福度が 1・2・4 のグループは相対的に少ない傾向が見られた。

幸福度の違いによる幸せの要因数の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 38）（※分散分析に当たっては、幸せの要因数の回答を標準化している。以降の分析も同様の処理を行っている）

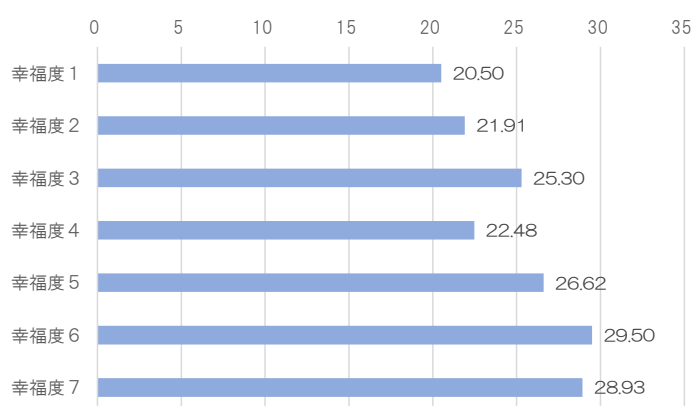


図 33. 幸福度別幸せの要因数

表 38. 幸福度別幸せの要因数の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
幸福度 1	2	89.593	44.796	721.647
幸福度 2	11	507.122	46.102	68.765
幸福度 3	27	1329.496	49.241	89.612
幸福度 4	126	5875.988	46.635	93.452
幸福度 5	156	7872.206	50.463	77.633
幸福度 6	151	8023.961	53.139	90.735
幸福度 7	71	3735.111	52.607	76.423

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	3567.260	6	594.543	6.879	0.000	2.115
グループ内	46413.663	537	86.431			
合計	49980.922	543				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、幸福度 5 と幸福度 1・2・4 の各グループの間にそれぞれ 1%水準で有意な差が、幸福度 7 と幸福度 5 の間に 10%水準で有意な差があると判断された（図 34）。このことから、統計的にも、幸福度が比較的高い回答者は幸せ要因数が多い（感度が高い）傾向にあると考えられた。

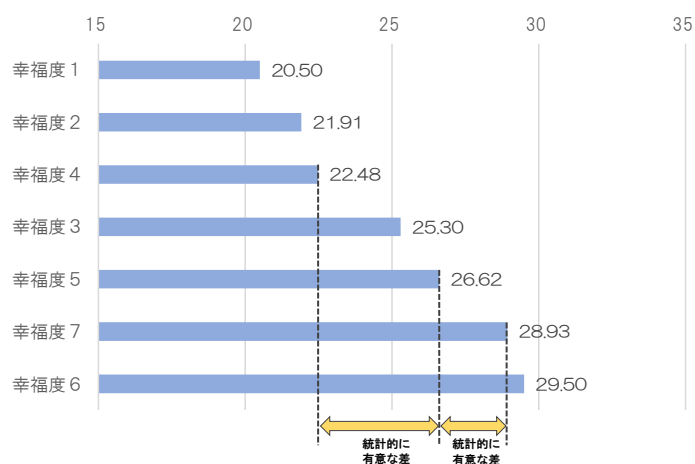


図 34. 幸福度別幸せの要因数の平均値の差の検定結果

・分析⑤. 主観的幸福度と要因ギャップの関係

「幸せの要因」について、仮説として、「幸せを感じる要因に該当するが、その要因を享受する機会が少ないと回答した項目が多い場合、幸福度は低めになる」と考え、その項目数を「要因ギャップ数」として設定し、幸福度との関係を調べた。「要因ギャップ数」は、回答者ごと及び幸せを感じる時・ことの質問の項目ごとに集計した（要因ギャップを感じている場合は1、感じていない場合は0とした）。項目ごとに要因ギャップを感じている回答者の割合を集計した結果を図35に示す。

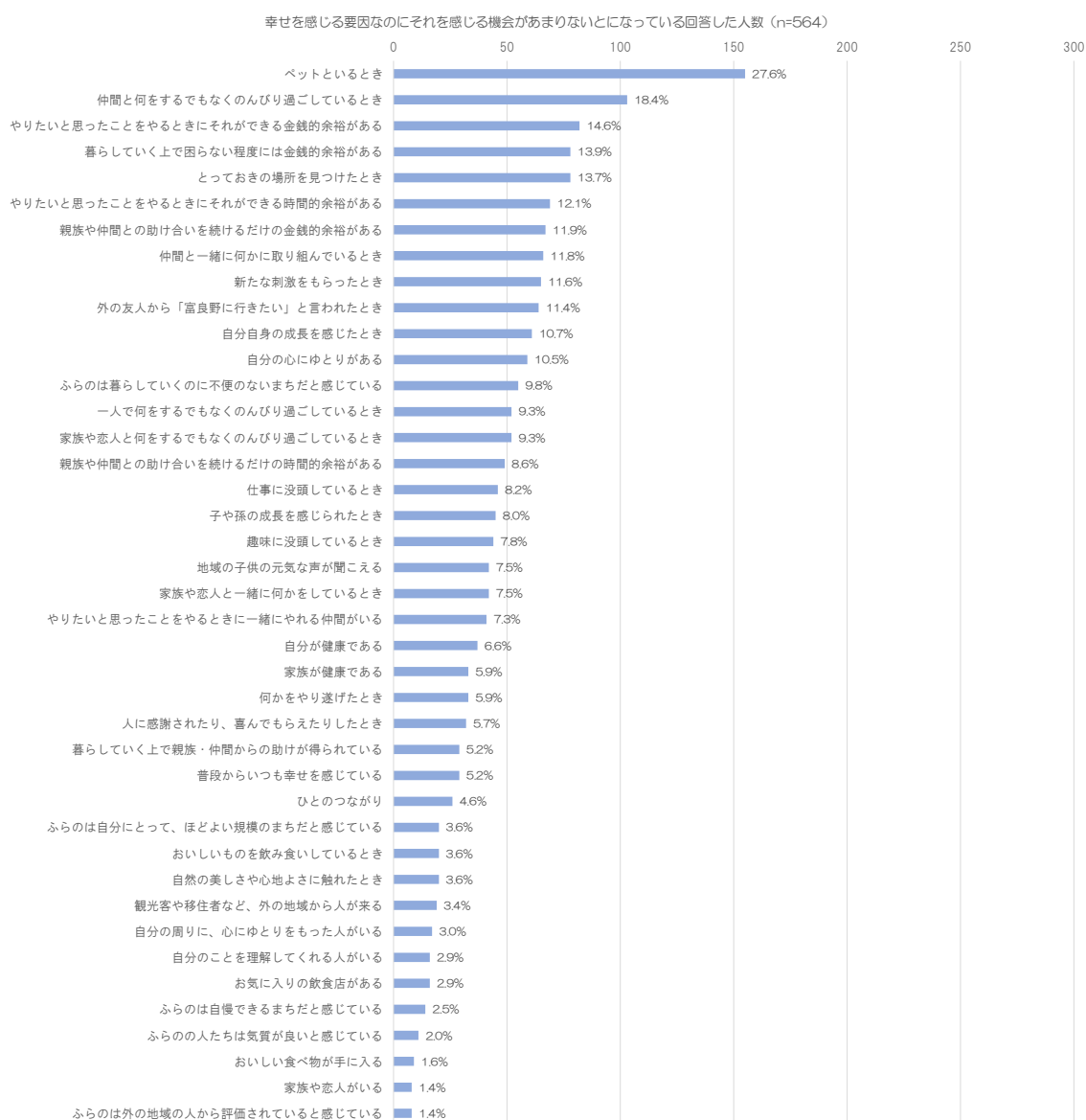


図35. 要因ギャップを感じている回答者の割合

要因ギャップの多寡が幸福度に影響しているか否かを確かめるべく、要因ギャップと幸福度の相関関係を分析した。その結果、相関係数は-0.162 となり、幸せの要因と幸福度は強い相関関係にないと考えられた。

続いて、幸福度の度数ごとに、要因ギャップ数（6 区分）別回答者数を集計した。その結果を表 39 に示す。また、要因ギャップ数（6 区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図 36 に示す。表 39 及び図 36 より、要因ギャップ数の多いレンジほど幸福度は低い傾向が見られた。

要因ギャップ数のレンジごとの幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 40）（※要因ギャップ数 20 以上のサンプル数は 1 だったため、分散分析・t 検定の対象から除外している）。

表 39. 幸福度と要因ギャップ数のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
要因ギャップ数0	150		2	1	0	28	44	50	17
要因ギャップ数1以上5未満	253		0	5	12	51	68	73	40
要因ギャップ数5以上10未満	126		0	2	10	35	40	20	14
要因ギャップ数10以上15未満	22		0	1	4	6	4	7	0
要因ギャップ数15以上20未満	9		0	2	1	5	0	1	0
要因ギャップ数20以上	1		0	0	0	1	0	0	0

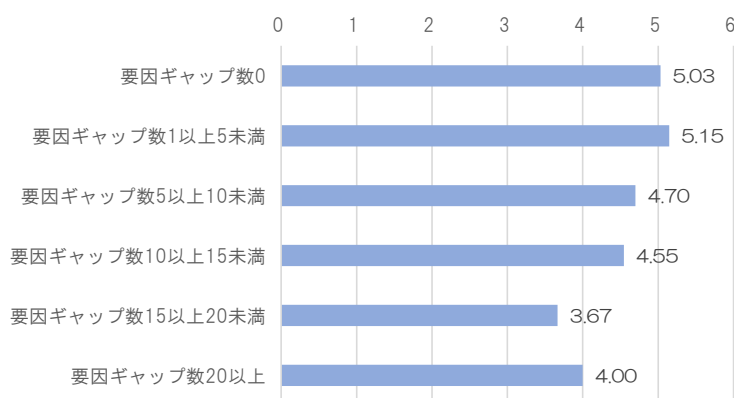


図 36. 要因ギャップ数別幸福度の平均値

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、要因ギャップ数 0 のグループと要因ギャップ数 5 以上 10 未満のグループの間に 10%水準で有意な差が、要因ギャップ数 10 以上 15 未満のグループと要因ギャップ数 15 以上 20 未満のグループの間に 10%水準で有意な差があると判断された（図 37）。これらのことから、統計的に、要因ギャップ数が多い回答者は幸福度が低い傾向にあることが分かった。

表 40. 要因ギャップ数による幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
要因ギャップ数0	150	6.757	0.045	1.167
要因ギャップ数1以上5未満	253	30.548	0.121	0.884
要因ギャップ数5以上10未満	126	-22.613	-0.179	1.016
要因ギャップ数10以上15未満	22	-6.204	-0.282	0.716
要因ギャップ数15以上20未満	9	-7.840	-0.871	0.674
要因ギャップ数20以上	1	-0.648	-0.648	-

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	17.050	5	3.410	3.479	0.004	2.230
グループ内	543.950	555	0.980			
合計	561.000	560				

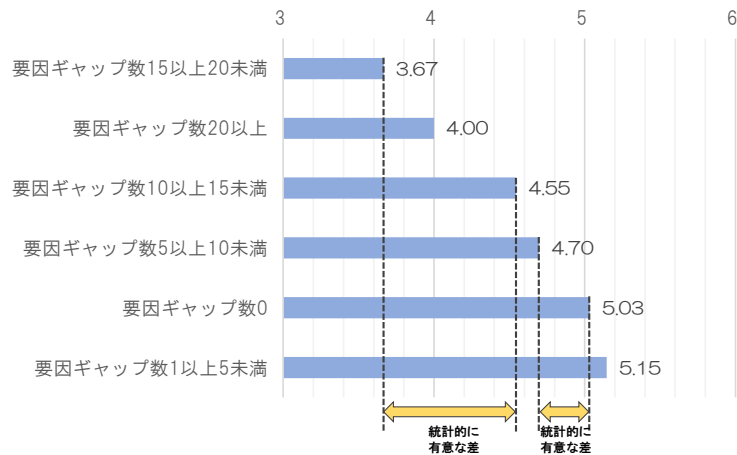


図 37. 要因ギャップ数による幸福度の平均値の差の検定結果

・分析⑥. 普段から感じる幸せか言われてみて気付く幸せかについて

幸せを感じる時の質問(問 12)の各項目について、「普段から幸せを感じる要素」と回答した割合と「言われてみれば幸せを感じる要素」と回答した割合に差があるか否かを t 検定で確認した。その結果、全項目で両者に有意な差(1~5%水準)があると算出された。その結果を表 41 に示す。

表 41 より、「おいしいものを飲み食いしているとき」「趣味に没頭しているとき」「何かをやり遂げたとき」「一人で何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき」「家族や恋人と一緒に何かをしているとき」「家族や恋人と何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「子や孫の成長を感じられたとき」「ペットといるとき」「自然の美しさや心地よさに触れたとき」は普段から幸せを感じる要素である傾向が強く、「仕事に没頭しているとき」「自分自身の成長を感じたとき」「新たな刺激をもらったとき」「仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき」「仲間と何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき」「普段からいつも幸せを感じている」「とっておきの場所を見つけたとき」は言われてみれば幸せを感じる要素ある傾向が強いと考えられた。

表 41. 普段から感じる幸せか言われてみて気付く幸せかについての検定結果

	普段から そう感じていた	言われてみれば そうだ	t 検定の結果	
T01	おいしいものを飲み食いしているとき	61.0%	29.1%	1%水準有意な差がある
T02	仕事に没頭しているとき	27.3%	40.3%	1%水準有意な差がある
T03	趣味に没頭しているとき	48.7%	32.1%	1%水準有意な差がある
T04	何かをやり遂げたとき	46.0%	37.8%	1%水準有意な差がある
T05	自分自身の成長を感じたとき	29.6%	46.0%	1%水準有意な差がある
T06	新たな刺激をもらったとき	29.1%	46.0%	1%水準有意な差がある
T07	一人で何をすることもなくのんびり過ごしているとき	42.8%	36.9%	5%水準有意な差がある
T08	仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき	33.2%	42.1%	1%水準有意な差がある
T09	仲間と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	26.4%	44.2%	1%水準有意な差がある
T10	人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき	50.6%	34.0%	1%水準有意な差がある
T11	家族や恋人と一緒に何かをしているとき	46.7%	34.8%	1%水準有意な差がある
T12	家族や恋人と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	43.1%	35.8%	5%水準有意な差がある
T13	子や孫の成長を感じられたとき	56.9%	18.4%	1%水準有意な差がある
T14	ペットといるとき	25.5%	15.5%	1%水準有意な差がある
T15	自然の美しさや心地よさに触れたとき	50.8%	30.5%	1%水準有意な差がある
T16	外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき	25.8%	44.0%	1%水準有意な差がある
T17	普段からいつも幸せを感じている	36.0%	44.6%	5%水準有意な差がある
T18	とっておきの場所を見つけたとき	27.6%	42.2%	1%水準有意な差がある

• 補足分析. 主観的幸福度と地域しあわせ風土指標の関係

幸福度の度数、風スコア、土スコア、風+土スコアの相関係数を算出した結果を表 42 に示す。表 42 より、幸福度の度数と地域しあわせ風土指標の各スコアはそれぞれ強い相関関係にないと分かった。

表 42. 幸福度と地域しあわせ風土指標の各スコアの相関係数

	幸福度	風スコア	土スコア	風+土スコア
幸福度	1			
風スコア	0.448	1		
土スコア	0.238	0.406	1	
風+土スコア	0.407	0.832	0.844	1

ただし、幸福度の度数別に風スコアの平均値を見ると、幸福度 1 及び 2 グループを除くと、幸福度が高いほど風スコアも高い傾向にあった（図 38）。なお、幸福度 1 のグループはサンプル数が 2、幸福度 2 のグループはサンプル数が 11 であり、平均値によって他のグループと比較して傾向を議論するのは難しい。以上の結果を踏まえて、幸福度が比較的高い回答者（幸福度 5 以上）とそうでない回答者（幸福度 4 以下）で風スコアの平均値に差があるか否か確認するべく t 検定を行ったところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 43）。これらの結果から、幸福度が高い回答

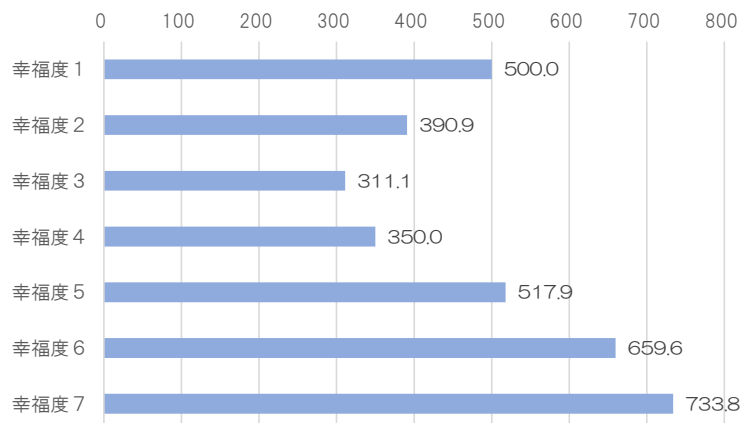


図 38. 幸福度別風スコアの平均値

表 43. 幸福度別風スコアの平均値の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	53.084	43.987
分散	83.045	75.312
観測数	378	166
仮説平均との差異	0	
自由度	330	
t	11.086	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.967	

者は風スコアも強い傾向にあると確認できた（図 39）。（※分散分析に当たっては、風スコアの回答を標準化している。以降の分析も同様の処理を行っている。）

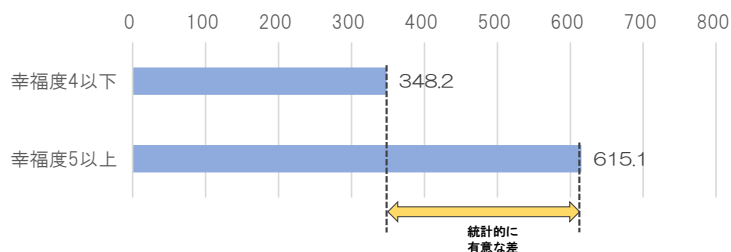


図 39. 幸福度別風スコアの平均値の差の検定結果

幸福度の度数別に土スコアの平均値を見ると、幸福度1を除くと、幸福度が低いグループ（幸福度4以上）の土スコアは相対的に低い傾向にあるのに対し、幸福度が高いグループ（幸福度5以上）の土スコアは相対的に高い傾向にあった（図 40）。そこで、幸福度が比較的高い回答者（幸福度5以上）とそうでない回答者（幸福度4以下）で土スコアの平均値に差があるか否か確認するべく t 検定を行ったところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 44）。これらの結果から、幸福度が高い回答者は風スコアも強い傾向にあると確認できた（図 41）。

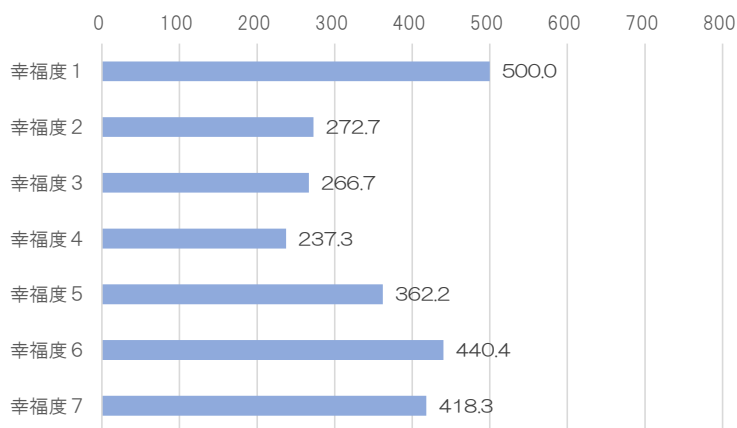


図 40. 幸福度別土スコアの平均値

表 44. 幸福度別土スコアの平均値の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	51.775	46.622
分散	102.264	75.776
観測数	378	166
仮説平均との差異	0	
自由度	363	
t	6.044	
P(T<=t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.649	
P(T<=t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.967	

以上より、地域しあわせ風土指標と主観的幸福度は対応していることが確認できた。

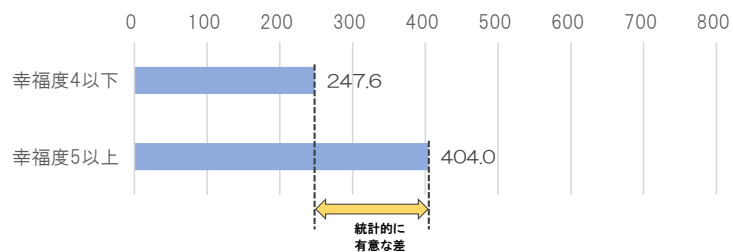


図 41. 幸福度別土スコアの平均値の差の検定結果